

陳舜臣さんを語る会通信

NO.37 May 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年5月10日

中国理解の必読書『儒教三千年』及び『論語抄』

『儒教三千年』は、1988年1月4日～8日、NHK教育テレビで放映された「中国そして日本—陳舜臣の語る儒教と現代」がもとになっています。

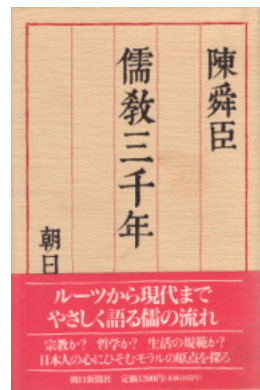
『儒教三千年』（朝日新聞社 1992）「あとがき」から引用します。右表紙画像も同著。

朝日新聞図書編集室のほうから、それを本にまとめたというお話があり、原稿におこしてもらったものを読んでみると、はたして言いたくないところがたくさんあった。じっさいに手を入れてみると、

もとの形からずいぶんはなれたものになって行ったが、けっきょくペンの流れに従うことにした。（中略）

いまでは一般の人の目には、儒教が中国と等身大に映っているが、そうなった流れをたどろうとしたのが、本書の狙いの一つである。

（編集委員 橘雄三）



『儒教三千年』各章の要約「第一章 儒のルーツ」

儒教の源流は殷

陳舜臣さんは、「儒教の源流は、殷にもとめなければならぬ」と言い、次の『帝王世紀』の記述をあげておられます。

殷の建国の始祖であつた湯が、夏の桀王を伐つたあと、七年も旱魃が続いたので、湯はみずから巫祝となり、「斎戒剪髮、断爪」、身を犠牲にして祈るとたちまち大雨が降つた。

殷王朝では、氣象を占い、戦、狩りなどを卜占で決めましたが、この卜占を王が主宰し、王があらゆる祭司権を独占しました。つまり、殷は神権国家であり、殷の王は典型的なプリースト・キング（聖職者の王）であつたのです。

殷周革命（神権国家から人間的政権へ）

殷の諸侯の一人、武（王）が、太公望（呂尚）を師とし、殷（紂王）を滅ぼし（放伐）、周を立てました。このとき、太公望は、大凶と出たト占の筮竹を押しつけ、亀甲を踏みつけて出兵し、殷を滅ぼしました。ト占より人間の判断力、合理性を貴んだのです。

陳さんは、「ここに人間主義の萌芽がみえます」と言いながら、「すでに、殷末には、神権政治から、人間政治への転換が行われていた気配が濃厚です」ともおっしゃっています。

いずれにしても、武王が死に、幼い成王を輔佐した周公の時代、孔子が理想とするような政治が行われたのはその通りなのでしょう。

葵丘の盟（前六五一年）

齊の桓公の招集で、中原諸侯が葵丘に会し、盟をなし、その遵守を誓約しました。当時、力をつけてきた南方の楚を意識してのものです。

第一条 不孝を誅せよ。樹子を易うること無かれ。妾を以て妻と為すこと無かれ。

第二条 賢を尊び才を育し、以て有徳を彰せ。

第三条 老を敬い幼きを慈しみ、賓旅を忘るること無かれ。

第四条 士は官を世（世襲）すること無かれ。

官事は損（兼任）すること無かれ。...

第五条 防を曲ぐるること無かれ。糴（穀物の輸入）を遏むること無かれ。...

ところで、それまでの会盟では、誓約のしるしに犠牲を殺して、その血をたがいにするり合つたものです。ところが、この葵丘の盟からは、誓約の事項をしるした書を、縛りつけた動物の背に載せるとい

う新しい形式がとられました。続いて陳さんは、以上の五か条とその誓約法を吟味してみますと、どうしても「儒」の雰囲気

をかんじます。と、おっしゃっています。

それから百年、春秋時代も終末

近くになって孔子が現れます。



右の画像は、孔子の話を聞く弟子たち

（株）エスピーオー発行DVD『怒の人—孔子伝—』より

『儒教三千年』各章の要約 第一章(続)～第三章

章	内 容
第一章 儒の ルーツ	孔子とその集団は慢性的失業状態にありました。その理由です。①儒は孔子の時代から秦にいたるまで、ずっと体制批判グループでした。孔子の主張を実施すれば士大夫階層の既得権が侵されます。また、②君主にとっては、春秋末期の食うか食われるかの時代、徳治主義は悠長過ぎました。■原始儒教 秦の焚書坑儒(ふんしゅこうじゅ)などを経て漢代に入ります。武帝の時代、漢が安定期に入ったころ、董仲舒(とうちゅうじょ)という大儒者が現れ、儒教は国教化されました。反体制から体制への変化です。 画像は孔子と顔回(いしだぎ成)。背景は旅を続ける孔子と弟子たち。(株)エスピーオー『恕の人』より
第二章 「礼あり、名あり」	まず、夫婦愛し合っていたのに、「孝」という儒教の徳目の犠牲になって、母親の命令で離婚した陸游(りくゆう)の話。ついで、太平天国討伐の曾國藩がかかげたスローガン、「礼教、名教を守れ」にふれます。 典礼問題。17～18世紀、中国におけるカトリックの布教に際し、中国人信徒が孔子崇拝や祖先崇拝に参加することの可否を中心として起った論争。これを契機として清朝のキリスト教布教の全面禁止に発展した。■イエズス会…適応主義、ドミニコ会及びフランシスコ会…厳格主義 孔孟…朋有り、遠方より来たる、亦た楽しからずや。老荘…鄰国相い望み、鶏犬の声、相い聞こゆ。民、老死に至るまで、相い往来せず。来客、とくに遠来の客を厚くもてなすのは、儒の徳目の一つです。一方、後者は、「小国寡民」を理想としています。儒教が中国と等身大といっても、いつも前者というわけではありません。後者が表に出た時代もありました。 漢王朝になり、乱世が治まると、「孝」をはじめとして秩序の徳目を強調する儒は、体制に都合の良い思想体系とみられました。儒は体制に身売りして、すっかり保守化してしまいました。■叔孫通(しゅくそんとう) 董仲舒 清末、体制側にあつて、政治改革を断行しようとしたグループがありました。そのリーダーが康有為(こうゆうい)です。1898年の「戊戌(ぼじゅつ)変法」「百日維新」■『孔子改制考』、『新学偽経考』 1911年、辛亥革命が勃発しました。新しく誕生した「中華民国」の儒に対する姿勢は複雑でした。孫文、袁世凱、蔡元培らの儒に対するスタンスはかなり違います。1919年、五・四運動が起りました。魯迅や胡適といった人たちは、中国が生まれ変わるには、儒教体制から抜け出さねばならないと考えていました。「打倒孔子商店!」。更には、文革時の「批孔批林」にまで、言及しています。
第三章 儒の変貌	儒の特徴をひとことと言えといわれると、私は「学問重視」を挙げたいとおもいます(p. 92)。 儒的世界がもつことになった大きな問題点、「専門家軽視」。 漢王朝 7代武帝は儒を国教化しましたが儒以外を排除したのではありません。名君の誉れ高い9代宣帝も、その政治は特に儒教的というわけではありませんでした。しかし、儒教に心酔した10代元帝の時代、政治は乱れ、王莽(おうもう)の漢王朝篡奪に至りました。私はこれを王道あるいは儒教による政治の失敗とみなしません。それは教条主義の失敗です(p. 111)。■三武一宗の法難 科挙までの官吏登用制度としては、漢代の郷挙里選、魏晉南北朝の九品官人法がよく知れています。このような時代を経て、煬帝のとき科挙が登場します。儒教は受験儒教となり、バランスのとれた教養を持つ人間になるという儒の理想の大きな部分が失われてしまいました。 徳川幕府も朱子学を官学としたが、科挙は採用しませんでした。→ 価値観の多様化。■伊藤仁斎 荻生徂徠 山鹿素行 中江藤樹 熊沢蕃山



江戸時代(一六七〇)岡山藩主池田光政によって創建された、岡山藩直営の庶民教育のための学校・学問所。講堂は国宝。

二本の大きな楷の木、奥が聖廟です。楷の木は、曲阜の孔林から持ち帰った種子から育てたこのことです。

画像は閑谷学校HPより

孔子を祀った聖堂のある岡山 閑谷学校(p. 81)

『儒教三千年』各章の要約 第四章～第六章

第四章 中華思想の周辺	中華思想について要約します。古代、中原(黄河中流の南北の地域)には異なる部族が雑居し、たがいに影響を与え合い、混血もおこなわれていました。失脚したグループが追放され、夷・狄・蛮・戎(い・てき・ばん・じゅう)と名づけられました。そして、中原に残った諸部族のなかから、中華思想が生まれました。彼らは決して自分たちを単一民族とは思っていませんでした。彼らのプライドは、血統ではなく、文明にあったのです。そんな背景を持つ儒は、とうぜん、文明主義となりました。
	■北魏(鮮卑族)、漢族宰相崔浩と国史事件
	アヘン戦争で負け、西洋の技術を取り入れようという洋務運動のなかで生まれたのが〔中体西用〕です。西洋の大砲や軍艦などはすぐれているが、「体」(制度・文化)は西洋にまさと考える、さらには、西洋文物の起源はすべて中国にあるとする思想です。〔変法〕は、日本の明治維新にならって、「体」さえも変えようとするものです。
	康有為、梁啓超らの戊戌の変法運動は失敗します(1898年)。続いて、義和団事件が起こり、更に、辛亥革命に至り、清朝は倒れます。
	儒には技術軽視の面があります。(p. 161)
第五章 思弁への道	「変法」というだけで、すでに儒はかなりのダメージを受けているのです。これまでの中国が儒とイコールであったとすれば、中国の衰微は儒の衰退ということになります。儒教の悲劇は、国教化されたことです。(p. 169)
	儒教は、漢代に国教化されて以来、唐代まで訓詁(くんこ)の学でした。宋代になって、儒者たちも、訓詁だけではあきたりなくなります。北宋の周敦頤(しゅうとんい)、程顥(ていこう)、程頤(ていいい)らによって儒教の体系化、哲学化が進み、南宋の朱熹(しゅき)によって集大成されたのが朱子学です。やがて、科挙は朱子学に拠るところとなり、学問は朱子学一色になってしまいます。朱子学…「格物致知(かくぶつちち)」、徹底的な主知主義。
	明代に入って王守仁(陽明)があらわれ、主観的唯心論の体系をつくりました。「心即理」「知行合一(ちこうごういつ)」をキーワードとする陽明学です。朱子学が官学化したのに対し、陽明学は官学に異を唱え、反体制でありました。江戸時代の陽明学者に、佐藤一斎、熊沢蕃山、大塩中斎、佐久間象山、吉田松陰らがいます。
	朱子学は「孔子にかえれ」を標榜。五経(詩経・書経・易経・春秋・礼記)中心から四書(大学・中庸・論語・孟子)中心へ。
第六章 儒と近代	儒教は朝鮮までは、そのままのすがたで伝えられたのに、日本では儒教から祭司を抜いて、倫理、学問、教養としての儒だけが採り入れられました。日本への儒の伝来で、はっきりと影響があらわれるのは聖徳太子の憲法十七条からです。
	最近、「儒教圏繁栄論」とでもいうべき説が唱えられています。経済発展が進み、治安がよく、秩序が保たれているのはみな儒教圏ではないかとうものです。韓国、台湾、香港、シンガポールで、四頭の竜などといわれています。儒教が近代化成功のキーワードだという説が有力になってきたのです。李登輝さんは、四頭の竜に共通しているのは、儒教よりも、いずれも植民地を経験したことである、とおっしゃいました。私もそれに賛成です。(p. 215)
	反儒教論説として、明末の李贄(りし)、清末の譚嗣同(たんしどう)、清末から中華民国にかけての嚴復、中華民国期の陳独秀・胡適(こてき)・魯迅、幕末から明治にかけての福沢諭吉らにふれています。
	康有為の師匠、広東の朱次琦(しゅじき)の「三世の説」を取り上げ、太平天国の首領、洪秀全に与えた影響に言及しています。
	陳舜臣さんは、朱子学や陽明学を「新儒学」と呼び、さらに、それを母体として、「新・新儒学」とでも呼ぶべきものも誕生したとし、黄宗羲(こうそうぎ)と王夫之(おうふうし)の思想にふれています。
	最後、蒋介石の「以德報怨」についての記述があります。

繁栄する儒教圏 四頭の竜 左よりシンガポール 香港 台湾(台北) 韓国(ソウル) ja.wikipedia.orgより



第1頁、第一章の要約の補足 白川静『字統』の記述から

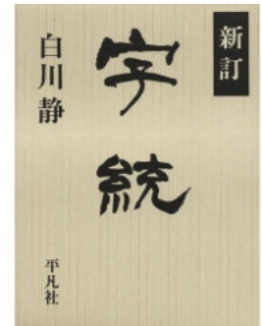
白川静『字統』p. 419、「儒」の記述から引用します。なお、丸数字と下線は編集委員の加筆です。

①需は下級の巫祝が雨乞いをすることをいう。儒はその階層から起こったものであるから、儒という。〔説文〕に②「柔なり、術士の僞なり」とあり、〔礼記、儒行〕の〔鄭目録〕に「儒の言たる、優なり、柔なり。能く人を安んじ、能く人を服す。又、儒なる者は濡なり。先王の道を以て、能く其の身を濡す」とするが、③これらの義は儒学が国家の正教となるほどの勢力をえたのちの考えかたで、墨子学派からみた当時の儒者は、その〔墨子、節葬〕に指摘するように、富家の喪をあてにする葬儀屋であった。(中略)孔子はそのような巫祝の伝統のなかから、普遍的な人間の道を求めた。

ところで、陳さんは、まず、後漢の許慎の『説文

解字』の②の部分^{かいじ}を引用し、そこから解釈を広げ、「儒とは、人間が社会でスムーズに生活する術ということになります」と規定されます。続いて、白川『字統』の①を引用、二つが共に、儒のルーツとして備わっていたかのような記述になっています。陳さんが、白川『字統』を引用しながら、③の記述に触れられないのはどうしてでしょう。これは、『儒教三千年』の第一章冒頭で、「儒」の二つの要素として、祖先や天地を祀る祭司部分と現世・実生活のモラルを説く部分の二つを、ほぼ並列的に挙げておられるのと軌を一にします。

儒のルーツを考える上で、③の記述は無視できません。



NHKBSプレミアム放映『空旅中国 英雄が駆けた道 老子と孔子の道』から

とここで、孔子は衛から南下する前に、一度覇国である晋に身を寄せようとして西方に向かったことは上掲書にも記述があります。番組のくだりは、恐らくこの時の旅と思われる。晋の外れにある攔車村でのごとです。牛車が行く先で四、五人の子どもが遊んでいました。道の真ん中で、石を積んでお城を作っているのです。孔子は、車を通れるようにその城をどかしてほしいと頼みました。子どもは孔子に言いました、

弟子を伴い、晋へ向かう途上の出来事

番組を紹介する前に、先ず、貝塚茂樹著『孔子』（岩波新書）を引用します。孔子が魯国を改革し、三桓氏を打倒しようとした計画が、今一歩というところで失敗し、失望のすえ祖国を旅出したのは前四九七年のことである。まず西北の隣国で中原の文化国でもあった衛に赴いて、しばらく足を休めた後、南下して宋国、鄭国、陳国、蔡国などの諸国を歴遊し、さらに衛国に立寄って、魯国に帰国したのは前四八四年である。この十三年の長い期間にわたった孔子の外遊は、孔子にとっては、受難の時代であり、一生を通じて最大の危機に見舞われたときであった。

「世の中に道を譲るお城があるとは聞いたことがありません。あなたこそ、城を避けて進むべきです」

孔子はその道理の正しさに心をうたれました。車を降りて、子どもたちの前にひざまづき、子どもたちを師と仰いだといいます。



■攔車村も天井関村も今の山西省

続いて、天井関村というところでの出来事です。ここにもふしぎな伝説が残されています。孔子の一行が辿り着いたとき、一匹のリスが足もとに駆け寄ってきました。木の実を抱えながら、孔子に向かいお辞儀をしたというのです。孔子はこの国の徳の高さに驚きました。小さな子どもたちがとても賢く、リスさえも礼儀をわきまえているのです。このような国に、果たして、自分が必要だろうか？孔子は考えます。この先、進んでも伝えられることはないかも知れない。一行は車の向きをクルリとかえ、もと来た坂道を下って行ったということです。



最晩期の一冊『論語抄』

『論語抄』（2007 中央公論新社）は、「あとがき」にあるように、「長いあいだのメモ（頭のなかのメモも含めて）」を整理、執筆したもので、書き下ろしとしては最晩期の作品です。また、2009年、文庫本化されています（中公文庫）。下の枠内、傍線は編集委員の加筆。

文庫本 キャッチコピー

中国の歴史と、そこに浮沈する多彩な人間像を描き続けてきた著者が幼児より親しみ、常に座右の愛読書としてきた『論語』。孔子とその弟子たちの言行録に、人間を、自分をみ、世界を、歴史を考える。最高の導き手による、アジアの「古典の中の古典」への誘い。

「あとがき」転載

『論語』はこれからも私の愛読書でありつつけるでしょう。その魅力は、多くの人に読まれてきたことにあります。私が『論語』を読むときは、これを読んだ多くの人たちが、この部分を読んでどう思っただろうかと想像するたのしみがあるのです。

たとえば、私が『阿片戦争』を書いたとき、欽差大臣の林則徐（一七八五—一八五〇）なら、「君子は器ならず」（為政第二）についてどんな意見をもっただろうかなどと考えてしまっています。李鴻章（一八二一—一九〇一）が日本と屈辱的な講和条約を結んで帰国するとき、「身を殺して以て仁と成す」（衛霊公第十五）の句を思いうかべなかったかと想像してみます。

こんな時、彼らが『論語』を読

んでいたのは疑問の余地のない前提となります。クリスチャンにたいして、バイブルの話をするのとおなじことです。

中国のことばは表意文字で書かれるので、二千年前と今とでも、ほとんど意味は通じます。しかし竹簡や木簡に記されるので、わかりきったことはよく省略されます。二千年前の常識は今のそれではありません。従って『論語』は倫理のテキストであるばかりでなく、歴史学や言語学、民俗学の宝庫です。

これが愛読書でありつつける理由です。

長いあいだのメモ（頭のなかのメモも含めて）を、いちど整理してみる気になったのは、私の仕事をよく把握して下さった中央公論新社の宇和川準一氏の慫慂によるものでした。ここに厚く感謝いたします。

二〇〇七年二月

陳舜臣



文庫本表紙

目次

はじめに	学而第一
為政第二	八佾第三
里仁第四	公冶長第五
雍也第六	述而第七
泰伯第八	子罕第九
郷党第十	先進第十一
顔淵第十二	子路第十三
憲問第十四	衛霊公第十五
季氏第十六	陽貨第十七
微子第十八	子張第十九
堯日第二十	あとがき

各篇名の付け方

『論語』10巻20篇、篇名の付け方は無造作です。各篇のはじめの章のなかから、二字ないしは三字をつまみとって、一篇の名としています。

吉川幸次郎『論語』

「まえがき」抜粋引用
傍線は編集委員加筆

いやしくも字を読める限りの中国人で、

「論語」を読まない人間はなく、また、一ばんはじめに読む書物は「論語」であった。儒学が独尊の地位を失った今日の中国でも、状態はあんがい変わっていないかも知れない。

また状態は日本にも波及した。日本人が中国の書物を読むようになって以来、もっとも多く読まれたのは、やはりこれであった。

かく中国でも日本でも、常にひろく読まれて来たのは、歴代の政府の政策も、ある程度、

朝日文庫版表紙



原因として働いていよう。しかしより根本的には、この書物が、人間の生き方についての知恵を、広汎に縦横に与えるという魅力、つまりこの書物自身に内在する魅力のためであったと、考えてよい。またそれは、必ずしも古代の書物であるからという理由で、尊重されて来たのではない。むしろ古今を超越した、人生の知恵の書として、尊重されたのである。それには、この書物の文体が、他の中国の古書よりも、かくだんに平易であり、明晰であるということが、あずかって力あるであろう。その使用漢字数が、全部で千五百二十字であるということは、文体の平易さを示している。

最晩期の一冊『論語抄』(続)

陳舜臣『論語抄』は、宮崎市定『現代語訳 論語』(岩波現代文庫)や吉川幸次郎『論語』(朝日文庫)のような、学者の手になる和訳とは異なります。エッセイです。論語本文の訓読、通釈だけでなく、そこから敷衍し、陳舜臣さんの蘊蓄が語られます。そういう箇所をここにいくつか取り上げました。

秋瑾の処刑

為政第二

子曰。非其鬼而祭之。諂也。見義不為。無勇也。

子曰く、其の鬼に非ずして之を祭るは諂なり。義を見て為ざるは、勇なきなり。

(中略)

一九〇七年、女性の革命家秋瑾が処刑されました。女性の場合、死刑はたいいてい絞首刑ですが、謀反人として彼女は斬首刑となったのです。謀反人の遺体は、「棄市」といって捨てられ、引き取りに行くことと逮捕されることになっていきます。それを承知の上で、盟友の徐自華と吳芝瑛という二人の女性が遺体を引き取って埋葬したのです。こういうのが「勇」であります。

徐自華と吳芝瑛は、秋瑾と義姉妹の盟を結んでいました。義姉妹の誰かが死ねば残った者がその遺体を杭州の西冷橋のほとりに埋葬する盟約があったのです。

(文庫本 P. 47-48)



琉球使節高良親方の慎重さ

公冶長第五

季文子。三思而後行。子聞之曰。再斯可矣。

季文子、三思して後に行う。子、之を聞いて曰く、再びすれば斯に可なり。

(中略)

明末清初時代、明の靖南王耿精忠が反乱を起して福建を維持していたころ、琉球の使節の高良親方(蔡国器)が明と清への二通の国書を用意し、到着してみると残明勢力は敗北していたので、明への文書を焼きすて、清への咨文(琉球王府から福建布政使司に宛てた文書)を進めたこと、思いあわされます。一六七七年のことでした。乱世にはこのような慎重さが望ましかったのでしよう。

康有為の『孔子改制考』

述而第七

子曰。甚矣吾衰也。久矣吾不复梦见周公。

子曰く、甚だしいかな、吾が表うるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず。

(中略)

孔子はここでもはつきりと、自分は創造者ではなく、祖述者

にすぎないと言っております。それでは、礼楽、制度を創造したのは誰でしょうか？ それは孔子が夢にみた周公だったのです。その周公を夢にみることで近ごろなくなつたと、孔子は老いをなげいています。

ところが十九世紀末から二十世紀のはじめにかけて、孔子こそが創造者であるという説があらわれました。周公の名をかりて制度や礼楽を孔子がつくつたというのです。

清の光緒二十三年(一八九七)に康有為という人物が『孔子改制考』という本を出版しました。

これは



学界に大きなショックを与えました。

三代はもとより、堯、舜などの聖天子はすべて孔子の頭からつくり出されたにすぎないというのです。孔子はきたるべき新王朝のために、古の制度を考証するように装いながら、制度を改訂したとされています。

清国は立憲制でなければ生きのびられないという事情もあり、隣の日本が維新(改制)で成功していることが、こんな説をうんだのでしよう。

親を告発する息子

子路第十三

葉公語孔子曰。吾党有直躬者。其父攘羊。而子証之。孔子曰。吾党之直者異於是。父為子隱。子為父隱。直在其中矣。

葉公、孔子に語りて曰く、吾が党に直躬なる者有り。其の父、羊を攘む。而して子、之を証せり。孔子曰く、吾が党の直き者は是に異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り。

(中略)

法律至上主義ー中国風に言えば、これは法家思想の極致でしょう。近代中国で法家思想が最も盛んであったのは、文化大革命の時代でした。事実、親を告発したことがよくあったのです。文革時代には、親を告発する息子が肯定されました。(P. 165)

